

三心成就の一心(続)

——入出二門の源泉——

安 田 理 深

一心というものを広大無碍の一心だということがもう既に深い言葉です。一心というのは衆生にあるんです、天親菩薩の一心帰命というのは。ところが天親菩薩というのはちょっと考えとやっぱり論家や。

関東の同行が、どうも自分らの念仏には力が入つたらんと言う。はじめは感激しとってもですね、だんだん年を経るとくるといふとマンネリズムで、心から念仏してもあくびとあんまり変わらん。力が無い。ところが親鸞の念仏は何か力がある。やっぱり体験なり教養なり違うんじゃないかと。我々みたいに朝から晩までなまけておる者の念仏は力が無い。親鸞のような体験の深い方の念仏とは違うんじゃないか。何かそこに秘密があるんじゃないか。こういうわけで関東の人々が尋ねて親鸞に聞いたわけや。とんでもない心得違いだと、こういうように親鸞が答えています。まあ始めは親鸞はやっぱり我々に同情して何でもないとっておるけど実はそこに親鸞には御苦労があると。そういうことを内へ隠して、内心に深い心を貯えて優しく言っておられるんだと。そこが御開山のゆかしいとこだと。そういうのを言うんです、「こころにくい」というのは。憎たらしいという意味じゃない、ゆかしいという意味なんです。「こころにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり」、とんでもないそれは見当違い

ですぞというように言っている。

『歎異抄』で言えば一心というのは「念仏申さんとおもいたつ心」です。ところが普通考えるというと、如来は広大無碍だ。けど一心というものは、位がやっぱり衆生ですから、衆生というものが本当に衆生として落ち着けてあるところに一心というものがある。一心の位は衆生にある、信心の位は。願というのはこれは如来にあるんです。如来の面目は、願という一字が如来の面目なんだ。だから一心を述べて願生と言っている、一心帰命願生と。一心に尽十方無碍光如来に帰命して願生安楽国と、こう言っているですね。ここでは「一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり」で、願生安楽国がないじゃないかと。願生なんかどうでもいいと、そういうふうに思われるけどそうじゃないんです。天親菩薩が「一心帰命尽十方無碍光如来願生安楽国」と言われた、その願生安楽国というのは一心帰命の帰命の意を願生というんです。一心帰命の帰命というものの内容を表わしたのが願生安楽国。ただ帰命する、ただ如来に帰するといっても、どうも無内容ですね。無内容だというのは、帰すると言っても帰するということがよくわからない。帰するのはどんな心持ちなんだと言った時に、帰するのは帰するんだと言ってもわからない。帰するということは信願するという意味ですね。御心のままにというのが帰すということです。御心のままにということ。だからして、そこに御心に対する感動がなければ帰するということの意味がない。御心というのは本願です。願心です。如来の願心のままにと、こういう具合に全身をあげて願心に生きるということ。願に生きると曾我先生が言われますね、そういうような意味がなければ帰するということに力が無いのではないか。ただ頭を下げたからということになっっていると、それは礼拝ということになるんです。礼拝は行なんです。帰命は心をあらわす言葉です。それが帰命という意味だと言っている。

それからもう一つの例はですね、善導大師が名号を解釈して帰命と。南無阿弥陀仏という南無は帰命なんだと、一応ね。南無というのは帰命ということをあらわす。南無という梵語は、漢民族の言語では帰命という。帰命とか帰依

とかいうことを表わすんだ。一応は帰するということを表わす。しかし再応は、同時に、それを止めてではない。その帰するということを更に、一応帰するのだけれど、その帰するということを更に押さえてみると、「亦是発願回向之義」と、発願回向ということをもっている。南無というのは「即是帰命」ですね、「亦是」というのは、「亦即是」ですね。「またすなわちこれ」と。帰命をやめて発願回向というのではない。帰命と同時にだ。それは一応の意義、再応、内面は、表面は帰するということだけれど、帰する内面を押さえてみるとそこに発願回向という。ただ帰するのではない、要求を持っている。如来に帰するというのはただ帰するというのではない、そこに何か要求を提出しているんです。そういうようにですね、願が表明されているんです。こういう意義です。こっち（帰命）の方は意、こっち（発願回向）が義、意義です。帰命ということの意義がそういう具合にあらわされている。帰命することの意義がね。つまり本願に目覚めたということです。如来の願に目覚めたのむと言う。その願にまかせる。如来の願に目覚めて、自分を如来にまかせる、こういう意味なんです。何も願に目覚めずただ帰命するというのでない。それは無内容。如来によって如来の願に目覚ましめられたのです。その大きな感動をもって帰命するんです。こういうような意味がここにある。だからして発願回向を略したというのは、いらないから略したのではない。帰命ということに込めてある。帰命ということの内容が願なんです。如来に帰命することをも更にもう一遍明らかにしてみると、願生彼国ということになる。

願というものはちょっと考えてみると、天親菩薩が「願う」と言っているんですけれども、そういう具合にちょっと見えますけれども、それはさっき言ったように、願と言ったら全て、衆生にあって願というものは如来の精神だ。こういうことが大事です。如来の願と衆生の願と二つあるとも考えられないことはないけれども、如来の願に感動して衆生の願というものが成り立っておる。菩提を願うとか、それから安楽浄土を願うとか、というようなことを考えてみると、それは口癖でそう言うけどね、願ってはいはしないでしよう、人間は。安楽浄土、菩提なんか。この世

の幸福は願っていますね。浄土に生まれたいとか、これはやっぱり癖で言っておるだけでしよう。いつまでもこの世におりたいのが人間の願いだ。如来になりたいというような願作仏心というようなものは夢にも発したことはない。これは癖で言っておるだけの話ですね。そういう言葉で自分の心を見失わすようなことになる。人間に願生というところが起きたのは、人間に菩提を願うとか、或いは浄土を願うとかという心が起きたのは、それは人間に如来の心が成就したんです。あり得べからざることが起こった。私に起こったけど私から起こったんじゃない。私に起こったんです。しかし私から起こったんじゃない。だから私に起こったままが実は私を超えておるんです。そういう内容を持った一心です。

人間は「願、願」と言うけど人間の願というのは欲の願です。願と欲と言っても、これは言葉の問題じゃないんであって、やっぱり欲生我国と言うんだから欲というのも同じことですよ。願生というものも欲生というものも、願は欲で同じことなんですけど、人間の願というものは欲と言ってもやっぱり欲望ですね。つまり人間の願というのは煩惱です。貪欲なんです。貪欲というもので彩られている願です。だから言葉というのは面倒で、言葉は同じですけどね、衆生の上に願生という。願生という言葉は天親菩薩の願生といわねばならない。衆生の上にあるんだけど、しかしそれは天親菩薩が起こしたんじゃない。天親菩薩に本願が名告ったんだ。感動というものはそういうものだ。感動というのはこっちが加えたのではない。我々に向うの聲が響いてくる。そういう具合に、天親菩薩に起こっているけど天親菩薩を超えておる。だから願は本来、衆生に起こっても如来のものだ。それから逆に今度は一心の方は信心という。信心のほうは実は廣大無碍の本願の信樂、廣大無碍の信心だけど、やっぱり信心という限り衆生に起こっている。衆生を超えた心が衆生に起こっているんだ。これが一心です。それから、衆生に起こっているけど如来の心だというのが願です、願生。こういう具合ですね。『阿弥陀経』の一心というものは、我々に起こっているのみならず我々が起こした一心です。ところが天親菩薩の一心というのはそうではなしに、我々に起こっているけど我々から

起こったんじゃない。我々を破って起こった。如来の心が人間を破って、人間の主観、人間の一心にしようといううな心を破って起こった。つまり本願が名告ったんだ。それが一心です。

涌出ということがありますね。『法華経』に地涌の菩薩というのがあってですね、それが面白いですね。観音菩薩とか勢至菩薩とか文殊菩薩とか普賢だとか、それはもう仏教一般に有名な菩薩だけど、『法華経』には聞いたことのない菩薩がでておる。地涌の菩薩。大地から涌き出した菩薩。こういうことを説いてある、『法華経』にはね。そして釈尊が、久遠実成の釈尊という方は、三十にして成道された釈尊かと思っていたけど、そうではないんです。本来、釈尊は人間から生まれて、人間から仏になった人ではないんです。三十の時に仏になった、そうではないんです。本来仏であって人間に現われた人なんだ。久遠の如来なんだということを地涌の菩薩が証明したんです。観音・勢至やこの世にある菩薩では証明できない。だからして地涌の菩薩で証明したと、こういうようなことが『法華経』に説かれている。ところが、これも聞いたことのない菩薩ですけども、『大無量寿経』の方を見ると今度は法蔵菩薩。これも聞いたことがない。観音とか勢至とかいうことは聞いたことはあるけど、法蔵菩薩は聞いたことがない。そこに法蔵菩薩というものと地涌の菩薩と何か深い共鳴がある。『法華経』と『無量寿経』というものは、坊さんの方から言うと、日蓮宗だとか念仏だとかえらく仲が悪いけども、お経の方は別に仲が悪いことないんであって、何かそこに共鳴する。こういうことをやっぱり見出されたのが曾我先生じゃないかと思うんですね。曾我先生以外の人はそういうことを注意したことがない。まあ曾我先生もはっきりそうだとおっしゃってられるわけではないけども、前後の言葉から見るとそうだと思うんです。やっぱり何か法蔵菩薩は天下りの菩薩ではない。大地、地涌と。地というのは何だというと、それは宿業の大地なんだ。宿業の凡夫から涌出した如来なんだと。それが法蔵菩薩です。こういうような意義を非常に深く感動されたんでないかと思うんですね。涌出という。泉、地下水が涌くというような意味ですね。泉涌寺という寺がある。真言宗の寺が京都にあります。泉涌寺という。やっぱり涌出すると。Ursprungだ。大地から地下

水が噴き出る、涌出するように噴出する。そういう力を持つておる。願が信として涌出したんだ。そういうのが願生とか欲生という意味ですね。本願が涌出したというような意味の信心だ。衆生の中に涌出しているんです。つまり衆生の外から人間に天下った信心じゃない。衆生の中に、本願と正対な、妄念妄想の衆生の中に、妄念妄想を破って涌出してある。そしてその妄念妄想を一心にしたのが……。我々が一心にしたのではない。我々から言えば、始めも終わりも中間も全部妄念妄想だ。死ぬる最後の一念まで妄想だ。その妄想の中に本願が名告って、その妄想を消し失うことなくして一心に転成する。だから妄念妄想の衆生も、本願に目覚めるなら妄念妄想のままが一心なんだ。一心に努力して一心にしたんじゃないんです。妄念妄想というものも戸を開けてみたら一心にあるんだ。つまり戸を開けるまでは千年の闇だ、戸を開けた瞬間に千年の闇が消えたと、こうも言える、消極的に言えば。しかし積極的には千年の闇が千年の光になった。

廣大無碍の一心と。何かちょっと言うと同来は廣大無碍だし、信ずるのは我々衆生が信ずるんだから、天親菩薩が信ずるんだから小さいと。その狭小の信心で廣大の如来を信ずるんだと。こういうように普通考えられそうです。我々の信心が応大無辺だというようなことは、なんぼ腹が太くても人間ではそんな大きな腹になれない。遠慮して言っているんだと、言わんたらん。謙譲といえは謙譲とも言えるんですけども、まあ謙譲と言ったらいんですけど、卑下しておるんじゃないですね。狭小な心が狭小な心だとどまっていたら卑下です。私のようなつまらん者だということの意味だ。つまり狭小ということは徹底すればそこで破れねばならん。それが謙譲だ。卑下しておるのは我慢だ。遠慮しておるのは我慢ですわ。自力の心だから遠慮する。謙譲は自力の心じゃない、自力が砕けたから謙譲になる。普通、我々が謙譲謙譲と言っとるのは卑下している、遠慮している。遠慮しているっていうのは、時になると反対に出る。威張る。威張る心というものが威張れないからして卑下しているだけの話なんですわ。仕方なしに卑下している。小さくなっているだけですわ。謙譲じゃない。謙譲は砕かれた心だ。卑下は萎縮しとる方です。砕かれた心を謙

讓という。一心はまあ言ってみれば砕かれた心です。砕かれた心だからして、如来の廣大無辺の徳がそれに入り満つる。如来の心は狭小な心に入ってこれないです、遠慮しとるような心に。入ろうとすればする程遠慮するから。そうではない、謙讓、砕かれた心に如来は入り満つる。人間には広大な心がない、だから人間の信心が広大なんだと。廣大無碍の一心というのは、謙讓無比な心を廣大無碍の一心という。威張っておる心じゃない。

清沢先生の時に精神主義という言葉があつて、あれを非常に誤解する。精神主義というと何か精神を主張するように、物質を馬鹿にして精神を主張するように捉えて、ということ聞いています。精神というのも主観というものも、今は主観ということは流行らないです、何でも客観ということ言うんですから。主観というようなことを言うとか主観主義という具合になつておるけれども、それは逆なんです。精神というものを主張するのではないであつて、砕かれた精神という。砕かれた精神というものです。まあ精神という言葉で、大言壮語しようとするのではないんです。二種深信を精神主義という。自力無効と我々が知らさしてもらうというのが精神ですね。それが大事です。そうすれば、世界を自分の思うようにしようというのではないんであつて、世界というものを、つまり客観のほうを動かそうと、困る場合に困らせる客観を見て、そしてそれを何か改めて困らんようにしようというのではない。そうじゃない。改めるものは客観ではない。困る方の自分の心を改める。不自由不満の心を打ち砕ければいい。そうすれば何が来ても受けていけるんだ。だから変えねばならないのは困るような客観の事情じゃないんで、困っておる自分を変えたらいいじゃないかと、こういうわけです。それが精神主義です。だから精神主義というのは、精神というものその力をただ強調するという意味ではなしに、物質を馬鹿にして強調するということではなしに、物質を精神にする。頂くんです。物質を物質と見ずに、物質を頂けばもう物質じゃない。そういうところに物質をはねのけた精神ではなく、物質を包む精神です。物質を精神に転ずるような謙讓な精神。こういうやうなところにやっぱり精神主義という問題がある。

そういうような意味が廣大無碍の一心と。大胆と言えばこれ程大胆なことはない。どこかに如来があってそれに帰命するんじゃない。如来に帰命する心が如来なんだと。我々が如来に感動した、感動した如来に我々は帰命する。感動もしない如来に帰命するという意味ではない。感動しない如来には帰命できないのだと。親鸞に「この行信に帰命せよ」とこう言っている。行信といったら人間ですわね。宗教経験の事柄です。宗教体験を行信というんです。行信に帰命するという。そういう言葉は普通じゃないですね。如来に帰命するという言葉はある。行信に帰命する、まあ信心に帰命するというような意味だ。大信心に帰命せよ。こんな意味なんです。本願に帰命せよと言ってるんですけど、その本願というものを言葉じゃなしに実際の具体的な自覚としてはどうだと。自分ない本願ではない。自分に成就した本願に頭が下がる。分らないものに頭を下げるのは盲信だ。そうではない。私の自覚の上に成就しているものに下げざるを得ないんです。盲信ではない、自覚です。如来を盲信するのではない。

まあそういうような意味があって、廣大無碍の一心ということが、なんでもないようなことだけど、実は不可思議不可称不可説の話なんです。それで不可思議光と言ったんです。帰命尽十方不可思議光と。帰命するという一心そのものが不可思議なんだ。まあ、一心帰命尽十方無碍光如来とあって、一心を述べて不可思議光に帰命すると言うんですから、不可思議光ということが一心の廣大無碍なることを証明するんだということです。それが、尽十方無碍光如来も、無碍光如来の世界も、全部が一心というものの廣大無碍を証明していくんです。一心が一心を証明してくるんです、廣大無碍であることを。それによって一心に救われる。如来に救われるというんではない。一心に救われる。そういうことが、ここで出ておるわけですね。『浄土論』を一言で言えば、『浄土論』はいろいろ説いてあるけれども、何よりも一心ということを書いてある。しかもその一心というのが、あれだけ長い『願生偈』全体を以て……。三種莊嚴というものを述べてある『願生偈』で、一心は一心で済んでいるのではないかと言うが、そうじゃない。一心を述べるのに、三種莊嚴をもって一心というものを表わしたんだ。それで一心の廣大無碍であることを述べる。この

一心というのは全法界を包む一心だ。如来を包み浄土を包んでいる一心だ。一心の他に浄土も如来もないんだ。一心が一心に満たされておる状態を、それを三種莊嚴というんです。一心というものは、天親菩薩が一心を起こしたけど、天親菩薩でも一心というものを包めない。起こした一心のほうが大きいんだ、天親菩薩よりも。天親菩薩が大きいのでなく、一心の世界が大きいんです。こういうようなことが述べてあるからして「一心偈」という意味があるわけなんです。これはちょっと言うと大胆不敵なことを言っているようですけど、そうじゃない。逆なんです。謙讓無比な心を言っているんです。

(本稿は、昭和五十年五月十六日、岐阜県慈光会主催の『入出二門偈』の会における午前の講義の後半の筆録を整理したものである。文責編集部)